

紀伊國屋書店、三省堂、ジュンク堂

ほか全国書店 または ネットにて

2013年 5月25日 発売

東京の「年輪」発掘散歩

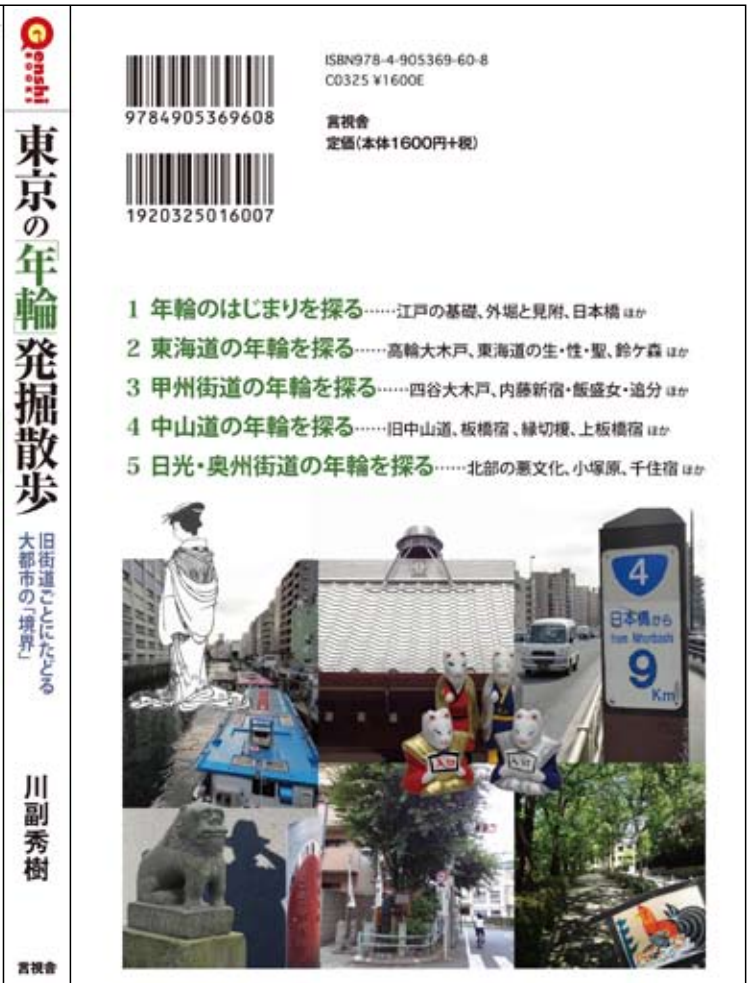
著：川副秀樹

発行：言視舎

仕様：A5版 カラー2頁+モノクロ200頁

価格：1680円（税込価格）

www.zoeji.com



都市が成長すると境界線が広がる。その年輪には足跡が残る。  
 それは世間話であり、地藏・閻魔・馬頭観音などの大衆仏であり、遊郭跡と処刑場跡であり、  
 日常圏外に追いやられた被差別民の生活臭である。  
 その多くは旧街道筋や宿場に集中している。

上文は本書扉に添えたものです。

本書は昨年『東京「消えた山」発掘散歩』でご好評をいただきましたシリーズの第二弾となります。

テーマは江戸開府以来、膨張し続けた大都市が刻んだ成長線＝年輪を探しながら歩く、つまり時代と共に広がった大都市の境界線を再発見する小さな旅です。そのような痕跡は旧街道に多くあります。そして歩いているうちに上記のような大変興味深い、ひとつの法則を発見したのです。右はその概念図です（カラー頁に掲載）。

具体的には最初の境界線となった江戸城外堀の見附を巡り、日本橋から放射線状に延びる五街道（江戸を出るまでは四街道）の主に旧道や宿場を歩き、最終的には異国への出入り口となる渡し場にたどり着きました。

写真は川副本人が撮影し（本人が写っている写真は友人による撮影）、地図も本人の書き起こしです。



かつて東京には地名としての坂と山がほぼ同数あった。しかし人口が増えると宅地が拡がり坂名は増え、山は削られてその歴史と共に消えた。そのような山を探し出し、歴史を発掘しながら散歩する。

